走れトラック

じょーく

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トラック運転手は走り続ける。悪神ＤＩＯニスをぶん殴るまで、諦めにゃい。

目次

2　1

17　1

1

数多もの無実の人間を殺し続け、邪知暴虐の限りを尽くしておきながら、誰に処罰されることも無いそれは正に、現代においての絶対王。逆らうことは許されず、抗議をしても誰も耳を傾けない。戦いを挑んだとしても即死で終わる。

絶対にして最強の殺人道具。最高にして最悪の転生道具。

それこそが――――大型トラックである。

「や、やっちまった……」

トラックの危険性はもちろんよく分かっていたつもりだった。

その高低差における死角の多さ、大きすぎるからこそできる慢心、油断。

だが、たとえ知っていてもできないことはある。そう――――車は急に止まれない。

いつも通り走り、いつも通り注意して、いつも通りに運転して、しかし、しかし、そのトラックの高いところにある運転席からではあまりにも死角が多すぎた。

黒猫。たった一匹の黒猫。

クロネコの山ちゃんではなく、動物の黒猫が、道路を横切ろうとして、運転していたトラックの前に来たのだ。いや、それだけならそのまま通りすぎてくれればよかった。

しかし、その黒猫はあろうことか、道路を横切ろうとして、そのまま突っ込んでくる俺のトラックを目にして動きを止めてしまったのである。日本では黒猫が横切ると不幸が起きると言われているが、それは今回も例外なく的中した。

わざわざ黒猫を助ける青年が居たのだ。

つまり、突っ込んでくるトラックの前に立ち止まっている黒猫を助けに、その青年もまた道路を横切って黒猫を掻っ攫おうとしたのだ。

しかし最悪なことに、青年はその黒猫を掻っ攫っただけで、そこから移動する余裕はなかった。結果、俺が運転しているトラックに轢かれた。

ドシーンというか、これが人を一人轢いてしまった時の衝撃なのかと、俺自身が驚くこともあったが、しかし、轢いてしまったと分かると同時に自分でも血の気が引いていくのが分かった。

「おいおい、おいおいおい！」

ハンドルを握りしめたまま、俺は自分の状況を整理しようとして、今、自分は現実に居るのかどうかを確認していた。

やっちまった……？　殺っちまった……？　嘘だろ、おい、どうすりゃあ良い。

どうしようもくらいに現実であるけれど、俺はとりあえず自分がどうすれば良いかを考えて、そして口に出す。

「や、やったか……!?」

はい、殺りました。

深呼吸をして、ハザードランプを付けてからトラックを降りる。そしてそーっと窺うようにトラックの前を見ると、黒い学生服を着た青年が黒猫を抱きしめて倒れていた。

……ふぅ。

血がだらだらとその青年の頭から垂れている。

汗がだらだらと俺の頭から垂れていく。ああ、そういえばそろそろ俺もおっさんだ。四十歳だよ俺も、おっさんだよ。まだまだ童貞の魔法使いだよ。プリキュア頑張れーって応援する日曜日を楽しみにしているただのおっさんだよ。

「……」

案外、まだ生きていたりするんじゃないかと思って、その青年の近くに座って、呼吸を確かめる。

呼吸はなし。

まあでも、と思いながらその青年の手首を持つ。

脈もなし。

俺はやれやれと思いながら立ち上がり、ため息を吐いて、胸ポケットにあるもう残り少ない煙草を一本取り出して、口に咥える。

「――やっちまったなあ……」

火を付ける気力すら湧かず、咥えた煙草を指で挟み取って、癖で口の中にある煙を吐こうとする。

吐き気が止まらねえ。おっさんの癖して心臓は恋をしたかのようにドッキンドキンのドキンちゃんである。プリキュアに恋したときだってこんな心臓は跳ねなかった。

なぜかこの現状がどこか笑えてきて、俺は苦笑いをしながら青年のほうをもう一度見る。

すると、にゃーと一声鳴く声が青年の真ん中あたりから聞こえてきたので、その声の方を見ると、トラックの前で立ち止まっていたあの黒猫が居た。

「……お前は生きてたんだなあ」

ああ、良かったよ。

お前を助けるために名も知らぬ青年は死んで、おっさんは社会的に死ぬんだ。

正直、それならお前だけが不幸になってくれればとか思っちゃうけど、しょうがねえよなあ。だって、助けたいって思っちゃったんだもんなあ。

空を仰ぎ見ると、突き抜けるような青空だった。

なんだかもう面倒くさくなって、俺は持っていた煙草を道路にポイ捨てする。生まれて初めてのポイ捨てだ。これでも警察に捕まる理由になるのだろうが、もう良いじゃな

いか。どっちみち警察に捕まる、ならば、初めてのちょい悪くらいは見過ごしてくれ。
ああ、ちくしょう。小学生時代の頃は、この青空を見るだけで、すごい良い気分になったけれど、これからはもう、この青空を見るだけで、すごい悪い気分になるのだろう。
悪いな、小学生の頃の俺。俺は、メロスというヒーローにはなれなかったよ。
「――諦めるにゃ」
「……あん？」
ここで知らない声が青年の方から聞こえてきた。
誰だろうと思いながら見ると、猫だった。
「この青年が死んだのは間違いにゃ」
「……」
「かの邪知暴虐の限りを尽くした王、ＤＩＯニスの間違いにゃ」
「……」
「今まさに逃げている真っ最中のＤＩＯニスを捕まえれば、この青年は生き返るにゃ」
「……」
俺は青空を見る。
突き抜けるような青空だった。
どこまでも続いているように見えて、気持ちの良い青空だ。

ああ――――俺も、堕ちるところまで堕ちたなあ。どうやら警察に捕まる前に、俺は人間として終わるらしい。
「走るにゃ」
「……どこをだよ」
「ＤＩＯニスは――逃げている」
「……」
「真っ直ぐ走るにゃ。ＤＩＯニスは邪魔をしてくるかもしれないけど、このクロネコＹＡＭＡＴＯがナビゲーションしてやるにゃ」
「……上等だ」
俺は青年の脇に腕を通して、トラックの助手席に座らせる。そして、黒猫がぴょんと、座らせた青年の膝の上に着地した。
「クロネコ、お前は信じない」
「……」
「だが――俺は信じる」
猫が喋るわけがない。分かっている、知っている。
だけど――これが現実だ。
これが俺の見ている現実なんだ。

青年は死んで、生き返らない。だけど、猫は喋って青年が生き返ると言っている。
ああ上等だよ。信じてやる。
俺よ、人の心を疑うんじゃない、俺の心はきっと現実に帰ってきている。
だから――走れ、トラック運転手！

トラック運転手は激怒した。
かつて邪知暴虐の限りを尽くしたＤＩＯニスに激怒した。
転生小説にはまって、トラックに轢かせて転生させたいという思いを持ったＤＩＯニスが、手違いで本当に青年をトラックで轢き殺させちゃったと言うＤＩＯニスに大激怒した。
「ふざけるなＤＩＯニスよ！」
アクセルペダルをあらん限りの力で踏みしめながら怒鳴った。
ハンドルは握りしめ、横も後ろも確認せずに、助手席の青年の膝の上に座っている黒猫は尻尾をピンと立てながら、トラック運転手と同じく前を見ている。

青空があった真昼間のはずが、前後左右どれも真暗闇に包まれていて、トラック運転手はこれは現実の出来事ではなく絵空事の出来事で、その絵の中に入ってしまったのだと理解した。

「サポートするにゃ、猫の目を貸してやる」

クロネコがそう言うと、真っ暗だったはずの目の前は途端にただ色の無い景色へと変化した。そう、猫の目は暗闇をも映す。

視れば道は津波のようにぐにゃぐにゃと左右に上下に狂っていた。小さな舌打ちをしながら、それでもただただ力を込めてアクセルペダルを踏切り、ハンドルを回す。

トラック運転手には運転の才能がない。努力もしなければ運んでいる人の荷物に愛情さえ持たない。

それでも今、トラック運転手という人間がここまでの道を乗り越えられるのは間違いなく、顔も知らぬＤＩＯニスへの怒りだろう。

さあ、数多もの憎しみを背負い――――走れ、トラック運転手！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

獣のような雄叫びと共に、トラック運転手はただトラックを走らせる。上下の道の坂を乗り越え飛んで見せて、ちゃんとした真っ直ぐの道に着地する。

ああだがどうだろう、目の前にある暗闇から突然の閃光！

迸(ほとばし)るその閃光の正体は火の玉。熱を持った実体が、トラックに向かってきているではないか。

運転手は涙する、今まさに火の玉は向かい、トラックは火の玉に向かう。道は踏み外せばそこはただの暗闇、逃げることはおろか躱すことさえできない。

「なんてことだ火の神アグニよ！　俺はただ、愚かでやまない悪神ＤＩＯニスをぶん殴りたいだけなのだ、どうか静まり給え」

しかし神はその願いを受け入れない、どころか火の玉はますます大きく成長していき、今まさにトラックさえ包む大きさで襲い掛かろうとする。

だが、叫ぶは助手席の黒猫。毛を逆立て牙を立て、猫よりも人よりも大きなその火をただ見つめて叫ぶ。

その絶叫をただの恐怖心からだと考えたトラック運転手は、もう駄目なのかと諦めて目をつむり、火の玉の激突を待つ。

火炎放射のようなその火の玉は確かにトラックを包み込み、フロントガラスさえ溶かしながら運転手および助手席の青年と黒猫を炎の海に溺れさせた。だがなんてことだろう、青年と黒猫はまったくの無傷で、運転手は上下の服がボロボロに燃えるだけで済んだのだ。

「クロネコの力ではこれが限界にゃ、だが、最後まで諦めるにゃ！」

見事トラックはその火海を乗り越え、男は服をボロボロに崩されながら、歯をむき出しにしてただアクセルペダルを踏み抜き続ける。

しかし神は試練をそれだけでは終わらせない。幾度もしない内に熱を豪雨を大雪を木の葉の山を降らせ、むき出しとなった運転席へと容赦なく襲い掛かる。

クロネコの力では青年とトラックを守るだけで精一杯、もはやそれさえも限界に達しようとしているのか、耳と尻尾をうなだれ、険しい顔つきで荒い呼吸をしている。だからこそ運転手は今度こそ何にも守られず、その山に襲われ呼吸さえ怪しくなる。

あっという間に顔は何万年もの時を超えたかのように荒れ果て、黒い焦げや擦り傷を作っていき、体力を奪っていく。

呼吸さえ怪しいその空間では、もはや正確な時を数えることさえままならない。気が付けばトラック運転手は朦朧とした意識の中で、諦めの言葉を紡ごうとする。

――もう良いんじゃないのか？

自分は頑張った。訳の分からないままに猫を轢きそうになり、その猫を守ろうとした人を轢き殺し、元凶であるＤＩＯニスをただ追っている。

俺は青年を助け、悪の神ＤＩＯニスの鼻を明かさなければならないのかもしれないが、どうして所詮は人である自分が神である者の鼻を明かせるというものだろうか。

神だの命だのくだらない。人は結局は神の玩具でしかないじゃないか。神の思うま

まに弄ばれ、試練という名の苦しみを与えられ続け、果ては幸福さえ渡されずに嘲笑い続けられる。人は神を超えられず、運命に抗えるわけもない。だとするのなら、ここで諦めてしまった方がずっと楽じゃないか。

気が付けば運転席は雪に包まれ、半身を覆っている。その間も容赦なく試練が降り注ぎ、決意を奪っていく。

「――諦めるにゃ！」

「……さっきから言いたいんだけど、それってどっちなんだよクソッタレがあああああああああああああああああああ！」

ああ悪い夢を見ていた。運命に抗えないというのなら、せいぜい神様にでも変わってもらおう。

トラック運転手は心の中で青年とクロネコ、そしてプリキュアに詫びながら、アクセルペダルを踏み続ける。

熱を超え、豪雨を超え、雪を超え、木の葉の山を越えて、太陽が映す影よりも速くトラックは音の速度で走り続ける。

もはや衣服はその効果を発していない。体中が生傷にまみれながら、二度、三度口から血を噴き出した。それでも運転手はただただトラックを走らせる。さあ、今こそ限界を超えて、運転手の拳という荷物を届けに行くのだ。

景色は暗闇を超えて、一つの国に変わる。悪神ＤＩＯニスの王国だ。
道路は黄金で、左右の家はダイヤでできていた。多くの人間が窓からこちらを伺っている。
「ああ、トラック運転手様」
うめくような声が風とともに耳に届いた。
「誰だ」
トラック運転手は走ったまま尋ねる。
「インフィニットストラトスでございます。悪神ＤＩＯニスによって作られた神、インフィニットストラトスでございます」
その神は姿を見せぬまま、トラック運転手に囁き続ける。
「無理でございます。その青年が死ぬ前にたどり着こうと、ＤＩＯニスは貴方様の世界には生き返らせず別の世界に転生させることでしょう。ＤＩＯニスは卑劣な男です、土下座をしてでも涙や糞尿を垂れてでも、その青年に謝罪する振りをして、難癖をつけて元の世界には返さないことでしょう。神の癖をして、自分にできないことがあると認めるのでしょう」
トラック運転手は何も言わずに、前にある赤い夕陽で照らされた景色を見つめた。
「やめてください。走るのはもうやめてください。もはや追い付いたとしても無駄で

す。貴方様は人間で、ＤＩＯニスは神なのです。拳が届く道理もありません。願いを聞く義務があるわけでもありません。神は傷つかず、滅びもしないことでしょう。ＤＩＯニスが逃げているのも、結局はただの戯れなのでございます。よく頑張りました、隣にいる青年も、そのクロネコ様の力で貴方様の頑張りは分かることでしょう。ですからもうおやめください。もはや誰も、青年さえも求めておりません。そのままでは貴方様が死んでしまいます」

もはや乾ききって血だらけの口で、トラック運転手は力いっぱいに言う。

「だから走るんだ。俺が死ぬまでに、今は走れない青年の代わりに精一杯走り続けるんだ。生きている俺が死なせてしまった彼のために走るんだ！　だからついてこい、神様なんかではなく俺の生き様を見ていろ！」

「ああ、貴方様はもう狂ってしまっている。分かりました、良いでしょう。トラックの荷台に私の意識を乗らせていただきます。私が貴方様の最後を見届けさせていただきます」

どこを目指せば良いのか分からない、けれど隣にいるクロネコのナビゲートの下に、トラック運転手は走り続ける。

先の角を曲がり、まっすぐ行き、時にはすれ違う民たちを驚かせながら、そしてそこに着くまでには見えなかったはずの、天に届かんばかりの赤い塔の前に着いていた。

直感と言うべきか、クロネコが教える前にトラック運転手はブレーキを踏んで、暗闇でも火の玉が来ても、あらゆる試練が飛び交う道中は知らせ続けていたトラックを止まらせた。
「ここにゃ」
「ああ……ここが」
もはや喉はつぶれて、その先の言葉が出ない代わりに血を吐いた。
トラック運転手としての生きがい、目的地のゴールが少しの満足感を与えて、身体はこれ以上の労力を認めようとしない。それでも、寄りかかるようにしながら運転席の扉を開けて、そしてそこからなだれ落ちるようにトラック運転手は地べたに足の次に肘をついて、外に出た。
それだけの行動で息は乱れ、視界は霞む。そして気が付けば目の前には青年と共に助手席にいたはずのクロネコが目の前に居た。クロネコは変わらず、黄色の目に黒の瞳で運転手を見下ろし、尻尾をゆらゆらと揺らしながら言った。
「諦めるにゃ」
「……だ、から……どっちだよ」
諦めろなのか、諦めるななのか。
その分からない答えが、どうしようもなく笑えてきて、トラック運転手は力なく笑っ

た。
まだ終わっていないと分かっている、始まってすらいないと分かっている。トラック運転手は今、ようやく青年を助け出せるスタートラインにまで立ったのだ。
手を地について、自身の身体を支え起こそうとする。腕はもはや自分のでもないかのように震えがとまらず、呼吸することを忘れさせ、気づけば叫びながらトラック運転手は立ち上がっていた。
「案内しろ、クロネコ。ＤＩＯニスを……」
「ああ」
そして目の前に居る小さな黒猫は、一度その目をつむり、また開く。
その目は白く、徐々に血管が出てきたかと思えば血管は真ん中に集中していき、青を作り、そこには人間の瞳ができていた。
身体は徐々に起き上がっていき、四足方向から二足方向へと進化してきたかと思えば、手足も体も獣のそれから、毛が抜きでて人間の身体を作っていく。
残っている黒の色も金色に濡れて、あくまで自然に、ただ進化を速めたような猫は、人間へと成り変わる。腕や脚は細く、手足は白く、いつの間にか黒色のズボンと白色のパーカーを着た少年が目の前に。
それは進化や変化というよりも、瞬間移動してきたのではないかという疑問が湧くく

らいにあっという間で、しかし、目の前には確かに、黒猫ではなく金色の短髪をして優れた顔つきの、もうすぐ４０歳となるおっさんの腹くらいまでの背をした日本のとは別の国から来ただろう異質な少年が居た。

「我がＤＩＯニスだ」

少年――クロネコは、悪神ＤＩＯニスの名を名乗るのだった。

2

友情や信頼などとくだらない。そんなものは裏切られるためにあるものだ。最後までそれがあろうとも、神も人も誰もが裏切られることに恐怖する。だから裏で切られぬために努力し、抗い続けて、裏切りから目を逸らして、裏切られるはずのないという思い込みを信頼などと言い換える。

信じられることを頼んでいる。トラック運転手にとってのクロネコは、この短い時間で友情や信頼に似た何かを持っていた。

諦めるにゃ。あれはどっちなのだろうとトラック運転手は思う。何度もそう言い、何度だってそう囁き、最後まで聞いたその言葉を俺に聞かせてどうしたかったのだろうと、考える。

考えて、トラック運転手は自分に呆れていた。クロネコを信じないと言いながら、自分の心を疑うなと思いながら、今、自分はいったい何をしているんだと考えようとしても、呆れ果てて何も言えやしない。

「ご苦労だった。ご足労だった。貴様の体力は回復させ、そこに居る青年と一緒に別の世界に転生させてやろう」

傷つけ、荒れ果て、疲れ果てていたトラック運転手の身体は、少年ＤＩＯニスが手をかざすと同時に、まるでビデオが逆再生されるかの如くみるみるうちに治っていった。血も焦げも腐りも何もかもが、まるで今までの冒険さえもが何もなかったことのように、全てが治っていった。

喉の痛みさえなくなり、トラック運転手は思い切り顔を歪ませながら、地面に向かって振り絞るように叫んでいた。

俺は――なんなんだろうか。滑稽で間抜けだ。ＤＩＯニスを追いながらにして、ＤＩＯニスと試練を乗り越えていた。なんて馬鹿な道化を演じていたことだろう。ＤＩＯニスと共演をする、ＤＩＯニスだけが見る二人舞台、これを滑稽と言わずしてなんと言おう。

世界が涙で歪む。ＤＩＯニスへの怒りも、元がクロネコだと知ってしまうと不思議と湧かない。今でさえトラック運転手は友情や信頼をクロネコに抱こうとしているからだ。裏切られながらにして、自分は裏切られてなんかいないのだと思い込みたくて、クロネコでありＤＩＯニスである少年の怒りをも否定する。

「何を迷う必要がある。貴様は戦い、見事勝利した。試練を乗り越えて見せ、このゴールにたどり着いた。顔を上げろ、前を見ろ、貴様が浮かべる表情は勝者の顔であるべきだ」

「……」

「必要とならば、良いだろう。糞尿を垂れながら土下座でもしてみせようか？　神でありながら神の尊厳を捨て、貴様たちの命など指一本でどうともできながら、貴様らをまるで神の上の存在であるかのように振舞っても良い。許してくれと涙を浮かべながら、お詫びに異世界へと転生させると言いながら、貴様に現実ではできなかった能力を付与してやる」

自分の懐が広いものであることを表すように、ＤＩＯニスは天にまで届く塔を背景にしながら両手を広げる。赤い夕焼けはトラックを、トラックの運転手を、ＤＩＯニスを赤く照らす。

トラック運転手は思う。自分はこれで良いんじゃないのかと、そう思う。神の言う通り、何を迷う必要があると言うのだろう。自分は自分の憧れたメロスというヒーローになれたのではないのだろうか、走って試練を乗り越えて、そしてそこにはハッピーエンドが待っている。青年と一緒に別世界で今のような日曜日のプリキュアしか楽しみにできない世の中から逃れ、別の世界へと別の自分となって生きていけるようになる。正真正銘のこれからに繋がるハッピーエンドで、ハッピースタートだ。

だからこそ、トラック運転手は眉尻を下げながら首を振った。

「それでも、ダメなんだよＤＩＯニス――――いや、クロネコ」

「……ほう、何がだ。一体貴様に何の不満がある。青年は助けられ、貴様は報われる。青

年も結局のところ、こんな世の中から逃れたいと――」
「関係ないんだ、ＤＩＯニス。青年の気持ちなんて、何一つとして関係ない。そこに居る青年がどのような気持ちで生きてきて、何を見て、何を聞いて、何を思いながらにして過ごしてきたのかなんて、もう４０となるおっさんにはこれっぽっちも理解できやしない。もしかしたら、昔の俺と同じでメロスというヒーローに憧れたのかもしれない。もしかしたら、昔の俺と同じで青空を見て良い気持ちになったのかもしれない。もしかしたら、今の俺と同じでプリキュアを見ることを楽しみにしているのかもしれない」
――だが違うんだよＤＩＯニス。俺は自分を誇れやしないんだ。
「何がだ。貴様はメロスに匹敵するヒーローではないか」
「違うよ。俺はメロスなんて大層なヒーローなんかじゃない」
ここまで一緒に来てくれたトラックを思う。それはメロスの偉大なる脚だ。
ここまで一緒に来てしまった青年のことを思う。それはメロスの偉大なる友だ。
ここまで一緒に来ることになったクロネコを思う。それはメロスの――――――王様だ。
「この物語にはお前の改心がないじゃないか。友情努力勝利。ああ結構だ。だけどなあクロネコ。それでもなあクロネコ！　俺はこんな終わりが！　お前が土下座して許しを乞いたって良い終わりが！　お前自身が悪神のままで結局終わっちまうような終わ

りが俺は嫌なんだ！」

トラック運転手は今日で魔法使いになるほどの貞操を守り続けた戦士である。だからこそ、彼は今日だって妥協という二文字を許さない。青年やインフィニットストラトスが許そうとも、何よりトラック運転手自身が許せないのだ。だからこそ化粧などで騙されない本物を逃がさず、トラック運転手は正直に生き続ける。

「ならばどうする？」

「決まってる。俺は――――諦めない」

友情愛情信頼、思い願い考え、どれだけ裏切られ、絶望しよう。それでもトラック運転手は今、ようやく分かった。どれだけ間違っていても、嘘でも、偽物でも、諦めるべきではないのだと。

さあ、今こそ笑顔を見せて、悪神ＤＩＯニスに拳を向けるのだ――トラック運転手。

「ＤＩＯニス。よくも俺を騙してくれたな。ぶん殴ってやる」

「トラック運転手。貴様は人だ。インフィニットストラトスの言っていたことを思い出せ。あいつも――貴様が死ぬことを願っていないぞ」

「おらあっ！」

「ぐはあっ！」

何食わぬ顔をしているＤＩＯニスの頬をトラック運転手はぶん殴った。悲鳴を上げ

てＤＩＯニスは地面を転がり、二転三転して勢いが止まると、何があったか分からないように、殴られた頬を押さえながら、今さっき自神を殴った人であるはずの男を見上げた。
「な、なぜだ。貴様はただの人で――」
「馬鹿め。俺が一体どれだけの数の神を相手取ったと思う」
　百人ではまるで足りぬ。トラック運転手はその荷物を運び、時には喜ばれながら、理不尽に怒られながら、冷たい世の中に泣きながらお客様という神に荷物を届けてきた。そう、今更ＤＩＯニスごとき神に、拳という荷物を届けられる道理はないのだ。
　辛い過去を思い出したあまり、ハゲ散らかることを気にし始めているトラック運転手は声を荒げて少年ＤＩＯニスに怒鳴り散らしていた。
「貴様に分かるか。プリキュアにしか希望を抱けない４０のおっさんの気持ちが！」
「わ、分からん！」
「貴様に分かるか！　そんなおっさんが青年を轢いてしまった男の気持ちがあ！」
　恐怖だ。自分のこれからを思い、自分のこれまでを思い、トラック運転手である前に、おっさんである男は恐怖した。神でもないのに糞尿を垂れそうになったくらいの恐怖だった。
「ＤＩＯニス！　俺は貴様が泣いて改心するまで、改神するまで、決して殴るのを止めん

！」

「暴力に訴える気か！」

「馬鹿が！　プリキュアも最後は暴力で終わるのだ！　今はメロスなんて前時代ヒーローは流行らん。現時代ヒーロープリキュアに俺はなる！」

　トラック運転手は背後に効果音を付けながら、尚もＤＩＯニスに襲い掛かる。少年に襲い掛かる４０となるおっさんの画はヒーローというよりも別の何かに見えるが、それでもトラック運転手は気にすることも無い。悪人と悪神の醜い争いが、今ここで繰り広げられていた。

「き、貴様ぁ……！　我は神だぞ！」

「うるさい！　俺はトラック運転手だ！」

　土の地面を転げまわり、お互いの頬を引っ張りあいながら睨み合う。距離があまりに近すぎるため、下手に殴ると隙が生じると二人は考え、結果、そのまま頬を限界まで引っ張りあう暴力しかできなくなっていた。

「ぐ……どけえ！」

「ぐわあああああああああああ！」

　しかし、ＤＩＯニスの身体が突如光り出したかと思うと、悪神を下敷きに地面に四つん這いになっていたトラック運転手を吹き飛ばす程の突風が吹いた。そしてトラック

運転手は背後にあったトラックに背中を打ち付ける。トラックは動いてはいないものの、その痛みは想像を絶した。呼吸することは一時的に困難になり、しかし突風は吹き続け、地面に落ちることも許されない。トラック運転手の打ち付けられ続けている形はさながら十字架で、それはまさしく神の罰であった。

「う……うぅ」

「ふ、ふふふ、ふはははは！　そうだ、我は神だ！　貴様など我自身が直接に手を触れるまでもない！　神の怒りを知れい！」

神は地面から起き上がりながらその笑いを轟かせると、途端に手の平を天に向け、そこから一寸ほど浮かび上がっている青い炎を作り出した。

「死ぬが良い。慈悲は……ない！」

横に振り被り――放つ。青い炎はそこから火炎放射のよう大きく成長し、そのままトラックごとトラック運転手を包んだ。地面を焦がす程の勢いある炎は、周りの土を剥がし、ＤＩＯニスからはもうトラックが見えなくなるほどの土煙が舞った。だが、神からすればもはや見るまでもない。ひょっとしたのならトラックだけは、神が青年をトラックに撥ねさせる前に変えた『転生トラック』だけはその神の恩恵を受け無事かもしれないが、そのトラックにも十字架の影がさながらエンブレムとして刻まれていることだろう。

だが――神のその予想は大きく外れていた。

「な……!?」

トラックは――予想通り傷一つなく。そして張り付いていたトラック運転手もまた全裸になりながらも無事であったのだ。

「な、なぜだ！　貴様……今度はいったい、何をした！」

トラック運転手はその問いに何も答えず俯いたままだった。その様子に逆行したＤＩＯニスは、ケリがついたとして止ませていた竜巻のような突風をもう一度その目の前の男に向かって放った。舞い終わったはずの土煙は再び舞い始め、もはや人の目線ではなく、ＤＩＯニスの後ろにある塔の見えない頂上程高く舞い上がる。それだけの突風はもはや、トラックであろうと家であろうと吹き飛ばすことができるだろう。

だが――土だけが舞い、それ以外は何者も浮かび上がらなかった。

「あ、ありえん……何者だというのだ、貴様は」

もはやＤＩＯニスも驚愕ではなく、怒りではなく、浮かび上がる表情はと言えば――畏怖だった。得体の知れないただのトラック運転手を、他でもない悪神ＤＩＯニスは顔を青く染めていた。だが、一つの解答がその悪神の頭に浮かび、そのたった一つのピースが徐々に周りのピースを当てはめていく。

「……もしや、もしや貴様。貴様貴様！　あの、あの試練か!?　我が与えたあの試練を乗

り越え、我の力でその身の穢れを消した結果が、我の力でその身を穢した結果が、貴様だと言うのか！　貴様という――――神に成ったのか！　答えろ、トラック運転手！」

神の試練を乗り越えた。神の力を直接その身に受けた。だからといって神の子ならばともかく、人が神に成るなど本来はありえない。あってはならない。

だが、そうでも考えなければこの現状を説明できないＤＩＯニスには、もうその答えしか考えることはできなかった。それでもトラック運転手は、神を哀れむような表情を浮かべ、無理やりな笑顔を作った。

「惜しいな。だが、そうだ。神に近いんだろう、きっと、今の俺というやつは」

先ほどまで少年の見た目をした神に拳を振るっていた人間と同じとは思えない、悟りを開いたような表情で、トラック運転手は自身の存在を確かめるように、手を握り、開放することを、二度三度繰り返して観察した。

「だが、だから――なんだと言うんだ！」

その神を前にして尚、余裕を見せる人間であったものの態度に憤りを隠さず、ＤＩＯニスはもう一度手を振りかざし、火を水を風を土を金をあの子のスカートの中を目の前にたたずむトラック運転手に浴びせる。それでもその力は、トラック運転手に到達する前に、まるで見えない防壁に阻まれているかのごとく消失した。

「我と同じ神であるなら！　我の試練を乗り越え、我の力を受けただけであるなら！

どうして貴様は我を凌駕する！」

ＤＩＯニスの言う通り、それは有り得ることではないだろう。試練を乗り越えたからと言って、力を直接的に受けたからと言って、だからといって、このような圧倒的なまでに力を寄せ付けない、そのような現象が起こるはずはない。そんなご都合主義は有り得る筈が無い。

そしてトラック運転手はまた、その表情は誰に向けたのか、哀れむように笑って言った。

「童貞（魔法使い）だからさ」

そう、穢れを知らないトラック運転手の貞操。それがついに――トラック運転手を覚醒させたのだ。

「それにな、ＤＩＯニス。言っただろう。俺はお前以外にもたくさんの神様と、王様と闘ってきたんだ。そう、お客様という存在とな」

そう言うトラック運転手の顔には笑みはない。さながら死んだ魚のような目で、ゾンビのような腐った目で、虚ろで光の灯っていない目で、しかしトラック運転手は人を神だと言ってのけた。

いつものことだった。どこにでもいる、そろそろ魔法使いになってしまう予定のおっさんは、どこにでもいるトラック運転手だった。朝も昼も夜も深夜も早朝も、道路を走

り、駆け巡り、会社の集まりではお客様は神様ですと叫ぶことを強要されるような、どこにでもいるトラック運転手だ。

ある客はそんなトラック運転手に、暑い中ご苦労様ですと言いながら、冷たいキンッキンに冷えてやがる……麦茶を差し出してくれた。トラック運転手はそんな麦茶一杯で泣きそうになったことがあった。しかし、どこの客もがそんなに優しい、そんな世の中のわけがない。多くの客は自分が神様のようだと思い、上の立場であると思いながら、トラック運転手が運んだ荷物に不備があるようなら怒鳴っていた。それがトラック運転手とは無関係で、最初からそうであったにも関わらずに、トラック運転手は謂れのない叱咤を受けていた。例えエレベーターの無いマンションの一番上へ重い荷物を抱えながら階段を上ったとしても、そこに客が居ないのなら何もできない。例え客から文句を叱咤を怒鳴り声を受けても、トラック運転手は何一つ、神に歯向かうことはできない。そう、神に人が抗えて良い理由なんて、あるはずがないのだから。初めは――ただ悔しかった。悲しかった。怒りたかった。しかしいつしか、トラック運転手だけではない多くの世の中のトラック運転手の顔は死んでいき、ただただ暗い顔をして死んだ雰囲気で、客の前でだけは文句を言われないように笑顔で荷物を運んでいた。

ある時トラック運転手は自分に聞いた。「どうしてお前はそんなにも暗いのだと」。

同じくトラック運転は答えた。「お客様は……トラック運転手を苦しめます」。

しかし、そう答えられたからといって、何かができるわけでもない。ただただ死んだように、さながら機械のように荷物を運び続けた。

運んで――青年を轢いた。

「神に近い存在となり、魔法使いであり、神の裁きから幾度も耐えてきた。それで理由は十分だ」

悪神は食いしばりながら、トラック運転手を睨みつけ、唸る。トラック運転手はそんな悪神に憐れみながら、悪神に近づいていく。赤い夕陽は向こうの緑の山にもう半身を隠している。明るい時間が終わり、人々の仕事が一応は終業時間となる瞬間に近づいていっているのだ。

「青年は……青年はどうする！　あの青年に罪はない、貴様はその青年を見殺しにすると言うのか!?」

それでもトラック運転手は近づく歩みを止めない。一歩一歩、力強く、全裸で、少年ＤＩＯニスに近づいていっている。

「貴様、それでも人間か!?」

「人間なんて、もう辞めているよ」

「く、来るな来るな来るな！　こっちに来るなあああああ！」

自然界の天敵となり得る物質を、トラック運転手めがけて放る。時には爆発を、時に

は電撃が、時には土塊が、トラック運転手に当たる。それでも、それはただ周りに土煙が起こるだけで、それ以外には何もない。
そしてついに――トラック運転手はＤＩＯニスの前に立ちはだかった。
「あ……あぁ……」
トラック運転手は屈み、ＤＩＯニスと同じ位置に目線を合わせる。そして恐怖で顔が歪むその悪神をそっと抱きしめた。
「我は……我は改心など、改神などしないぞ！」
「そうだな。だからまあ、そこは残虐非道のメロス様に頼もうや」
全裸のおっさんは少年が逃げないように、しっかりと抱き留める。ＤＩＯニスはその全裸の言葉の意味が分からず、何が起こるのかを考えた。
考えて――――戦慄した。
先ほど当てはめたパズルのピースを全て剥がし、新たなピースを一つ埋める。その周りがそのピースに合わせて、繋がっていく。記憶が、都合が、全てが――――繋がっていく。
「走れトラック……」

数多もの無実の人間を殺し続け、邪知暴虐の限りを尽くして置きながら、誰に処罰されることも無いそれは正に、現代においての絶対王。逆らうことは許されず、抗議をしても誰も耳を傾けない。戦いを挑んだとしても即死で終わる。
絶対にして最強の殺人道具。最高にして最悪の転生道具。
それこそが――――大型トラックである。
神の力を宿し、宿させた――――転生トラックである。
クラクションが鳴り、暗くなり始めている辺りを、強い光が新たに塗りつぶした。

「ん……」
トラック運転手は目を覚ます。覚ましてもすぐに、先ほどのことが夢ではないと気が付いた。なぜなら助手席に、夢ならば居ない筈の青年と、見覚えのない少女がいたからである。周りの風景はと言えば黒に染まりつつあり、夕の時刻が終わることを知らしめていた。脇には車が次から次へと通っているところを見ると、道路から外れた木の葉が散らばっている林へと置かれているらしい。

「気が付いたか、トラック運転手」
尊大に、横暴な口調でその見覚えのない少女はそう聞いた。金色に濡れている髪はツインテールにしており、真っ赤に染まる瞳は凶暴に見え、人々の恐怖心を煽るような少女だった。見覚えのないはずが、その声を聞いたらすぐに、トラック運転手には答えが分かった。
「全く、神を転生させるとはどういうことだ。おかげで我はこんな変ちくりんな少女の姿に変えられるわ……。なぜ姿を自由に変えれなくさせたんだ、こいつは」
不満そうに少女はアクセルの無い床を小さな足で踏みつける。それがどうも愛しく見えて、トラック運転手はプリキュアを思い出しながら笑った。
「しかも猫耳や尻尾は自由に付けられると言うのがまた意味わからん。見ろ、これ。本当に訳が分からんだろ。我が猫に姿を変えたことなんて、ただの猫らしい気まぐれだというのに」
そう言って、頭に両手を乗せ、すぐに離したかと思えば、そこには立派な金色の猫耳が乗せてあった。背後にも同じ色の尻尾がゆらゆらと揺れているのが見える。その尻尾が揺れて揺れて、青年の鼻辺りを通ったかと思えば、青年は身体を震わせ、息を何度か吸って、思い切り噴射させた。
「くしゅん！」

「おうわっ！　そうか、青年か！　いたなあそんな奴！」
「……」
「へ、あれ、あの、どこです……って、ああ」
　青年は戸惑いを隠さず、周りを見たかと思うとすぐに合点が言ったように声を挙げた。その膝に少女を乗せたまま、身体ごと向き直るように顔だけをこちらに向けて、頭を下げた。謝罪するその声は震えており、どこから体も本来よりずっと小さくなったように感じられた。
「あの、ありがとう、ございました。それと、ごめんなさい。僕、助けなきゃって思って、それで……それでっぃ……」
「やれやれ、誇れよ青年。我を救ったことは死んだ後も誇れることなのだぞ？」
「あ、あはは……って、あの、えと……どうぞ」
　苦笑いをしたかと思えば、青年は顔を真っ赤にして俯きながら、着ていた制服の上着をトラック運転手に差し出した。その上着がどういう意味かトラック運転手は首を傾げたが、答えにたどり着く前に少女が代わりに教えた。
「おいおい、気が付けよ。この青年はお前の裸を誰にも見せたくないのさ」
　今度はトラック運転手が赤面する番だった。そして少女が笑い、青年もつられて笑い、トラック運転手は死のうか悩む。

笑いがトラックに響く中、トラック運転手はそっと、ダッシュボードに手をかけて微笑んだ。

「ありがとうトラック……インフィニット、ストラトス」

試練を一緒に乗り越え、神に力を与えられた転生トラック。それは立派な神様である。

青年を轢き、おっさんは吹き飛ばされてトラックに叩きつけられ、最後には悪神と一緒に跳ね飛ばした。

ああ、メロスはここにいる。そこにいる。どこにだっている。

いつでもどこでも、早朝でも昼でも夕方でも深夜でも、世界中を走り続けている。誰がため、その英雄は今日も走り続ける。

さあメロスよ、今日も走るのだ。

メロスは今日も荷物を送り続ける。

差し当たり、今から王様へと送り届ける荷物は――メロスの親友と決まっていた。